著名人の人生を変えた“名言”

NHK「プロフェッショナル・仕事の流儀」H240206 放映

2020.02　後藤　忠

もう 20 年も昔になるが、仕事師たちのドキュメント「**プロジェクト X**」(NHK) が好きで、毎週欠かさず見ていた。

田口トモロウの語りと中島みゆきの主題歌とが相まって、見るたびに胸が熱くなった。

この番組のコンセプトは「思いは叶う」、「念ずれば花開く」であった。

一方、NHK をはじめマスコミ各社の「特別の教科 道徳」に関する評価は残念ながらネガティブなものが多く、その批判の多くは誤解によるものだと私には思えてならない。道徳教育対する先入観念や予断を排し、もっと公正・客観の見地から道徳科(の目標)を正確に理解すれば、きっと誤解は解けると思うのだが…。

同じ NHK でも、「道徳教育」とは異なるジャンルのこのシリーズは「まさに道徳教育そのものだ」と私はずっと思ってきた。

「プロジェクト X」に始まり、今も放送中の「**プロフェッショナル・仕事の流儀**」の主題（内容）はまさに道徳教育である。

なぜそう思うのか？

子供は『道徳』の授業で、「教材」に自己を映し、自己を見つめ、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を行う。授業で使用する「教材」には子供の心を映す鏡のような役割がある。

曇りがなく、よく澄んだ鏡（教材）は実に鮮やかに子供の心を映し出す。その意味で、本シリーズで織りなされる人間模様は、そのノンフィクション性とも相まって、道徳の教材にふさわしいものが多いと私は思ってきた。(「ペルーは泣いている」や「ふるさとのサクラ」などは、すでに道徳の読み物教材になっているが。)

教職に就いている我々教師にとっても、この番組から発せられるメッセージは大変示唆に富んでおり、刺激的だ。

ここに紹介する表題の放送は、「今を時めく著名人」たちの生き方を変え、人生を支えている“名言”の数々である。

私は 8 年前にこの放送を視て受けた強い感銘を今でも鮮明に覚えている。

得るは、捨つるにあり

－日本を代表する靴職人：**山口千尋氏**－

大手靴メーカーの社員だった山口は靴職人としての技量を高めたいと、会社を辞めてイギリスに留学することを考えた。

すると会社は「退職でなく、1 年間休職して行ってはどうか？」と提案してくれた。

山口は迷った。帰国後の生活を思うと退職は不安だ、しかし、1 年で学び切れるか…。

山口はこのことを尊敬する先輩に相談した。

すると、先輩は「辞めればいいじゃないか」と即答した。

その時、山口の頭にこの言葉が浮かんだ。

何かを捨てる覚悟がなければ、本当に得たいものは得られない。

山口は退職を決意し、一切を捨ててイギリスに渡った。そして、厳しい修行生活に耐え、今を成した。

「型破り」な演技は型を知らずにはできない。
型を知らずにやるのは「型なし」と言うのだ
－歌舞伎俳優：**坂東玉三郎氏**－

14 歳で「坂東玉三郎」を襲名した時、師匠の守田勘弥氏に言われた言葉である。

「奇跡の女形」と称えられ、常に新境地に挑み続けている玉三郎が、今も「戒め」としてこの言葉を胸に舞台に立つという。

我々が日々行う授業とて同じである。「型破り」な授業は型を知らずにはできない。型を知らずにやるのは「型なし」の授業というのだ。

まだ、山は下りてはいない。登っている
－訪問看護のパイオニア：**秋山正子氏**－

訪問看護師として日々患者の生命や人生と向き合う秋山を支えているのは、11 年前に末期がんで余命 3 ヶ月と診断されていた桃川弘二さんの一言だった。

当時 46 歳の桃川さんは我慢強く、無口で、心の内はもとより世間話もしてくれなかった。そんな桃川さんに秋山は声をかけた。

「そろそろ、山を降りているのだから、荷物を降ろしたらどうかしら？」

すると、桃川さんはこう答えたのだ。

秋山は気付いた。桃川さんは今も強い気持ちで病と闘っているのだ。人の存在の強さ、そして、人にはそれぞれの最期があるということを改めて知らされた瞬間だった。

決まった道はない。ただ行き先があるのみだ
－野生動物専門の獣医師：**齊藤慶輔氏**－

北海道に赴任した齊藤の元に絶滅危惧種のオオワシの死骸が次々と運ばれてきた。死因は鉛中毒。ハンターが撃った鹿の肉をオオワシがついばみ、鉛弾の破片を呑み込んだことによるものだった。齊藤は何もできない現実に絶望感を抱いた。

そんなある日、調査のために訪れたロシアのサハリンに向け、トラックを走らせていた時のことだった。凍土が解けた泥道にトラックはタイヤを取られ、何度も動かなくなった。齊藤はロシア人の運転手に声をかけた。「ロシアは大変だね。予定通りにはいかないね」

すると運転手はこう答えたのだ。

齊藤はハッとした。オオワシを守るという目標さえ見失わなければ、必ず道は拓ける。

帰国した齊藤は猛然と動き出す。半年後には、銅弾に切り替えるハンターが現われた。

野生動物の現状は今も厳しいままだ。しかし、だからこそ齊藤は奔走する。進むべき道は自分が作ればいいと。

自分の場所に誇りをもつ人間が好きだ。
－建築家：**隈 研吾氏**－

TOKYO2020 新国立競技場の設計で知られる建築家隈にも、かつてどん底の日々があった。

卓越した建築の才能は学生時代から開花し、32 歳で挑んだ自動車ショールームの建築、時はバブル真っ只中、隈はその比類なき才能を駆使して斬新な建物を建設した。

しかし、世間からは「景観を破壊している」という厳しいバッシングを浴びた。その後、建築の依頼はパタリと来なくなり、何もできない無為の日々が続いた。

そんなある日、高知県の梼原から住民の交流施設を作ってほしいという依頼が舞い込んだ。

梼原を訪ねた隈に、人々は口々に町自慢を始めた。棚田の美しさ、手入れが行き届いた杉林の見事さ…。それを聞きながら、隈の脳裏にアメリカ留学時に教授から聞いたリンカーンの言葉が浮かんだ。

「自分の場所に誇りをもっている梼原の人たちと、もう一度建築に向き合おう」

隈は梼原の人たちと何度も話し合い、設計を進めた。そして、2 年後に完成した建物を見て町の人たちは言った。

「都会的だけど、この町によく合っている」

よい仕事は、その仕事に誇りをもつ人間の中から自然と生まれてくるものであると。

自分の学校に、自分の学級に、自分の教え子に誇りをもつ先生が好きだ。

「おまえが考える 7 割で良しとして、ほめてやれ。」

－星野リゾート経営：**星野佳路氏**－

学生時代のことである。弱小アイスホッケーチームのキャプテンになった星野は、チームの強化には猛練習しか道はないと考え、部員たちに厳しい練習を強い、叱咤し続けた。しかし、チームは強くなるどころか、けが人が続出し、雰囲気まで最悪になってしまった。

そんなある日、星野は監督から呼び出され、こう告げられたのだ。

星野は納得できなかった。しかし、監督の言い付けである、しぶしぶ実践を始めた。

取るに足らない些細なことも褒めてみた。

すると半年後、自らハードトレーニングを望む部員が増えてきた。チームの雰囲気も良くなり、成績も上向いた。そしてついに、念願のリーグ優勝を果たしたのである。

チームの原動力はメンバーの良さを見つけて褒めることから生まれる。

星野は監督の言葉をリーダーの心得として会社経営に臨んだ。そして、「リゾート再生請負人」として大きな業績を上げるまでの会社に成長させた。

さて、児童生徒の教育を担当する教師の心得としてはどうだろうか？ 7 割は多過ぎはしないか？ では、何割で良しとしたらよいだろうか？

人は変えられないが、自分は変われる

－絵画修復家：**岩井希久子氏**－

ピカソ、ゴッホ、モネなど、数多くの世界的名画をよみがえらせた絵画修復師岩井希久子。

岩井がこの仕事に入った頃は、まだまだ女性の進出が少ない分野だった。男女格差の様々な軋轢に苦しむ中で、岩井がつかんだのはこの言葉だった。

人生の試練や障壁は自分を強くしてくれる。人生をよくするも悪くするも、自分の考え方次第である。人のせいにしては埒は明かない。

この言葉は児童生徒の教育を司る我々教師こそしっかり肝に銘じておかなければならない言葉ではなかろうか。

その他、

どうにかなることはどうにかなる。どうにもならんことはどうにもならん

－スタジオジブリ・プロデューサー：**鈴木敏夫氏**－

人生は一本の線ではない。一日という点が連続して一本の線になる

－日本屈指の樹木医：**塚本こなみ氏**－